

歌で習う「国語」

——植民地期朝鮮における唱歌と言語教育

林 慶 花

一、はじめに

一九三六年八月、ベルリン五輪のマラソンで孫基禎（ソン・キジヨン、一九二二～二〇〇二）が金メダルを獲得して朝鮮半島を興奮の坩堝に引き入れ、再び朝鮮の民族主義的な気運を焚き付けていた頃、朝鮮のある学者は言語学界の世界的な行事である第四回世界言語学者大会（International Congress of Linguists、一九三六年八月二六日～九月一日）に参加するためにデンマークのコペンハーゲンへ向っていた。同大会で彼は「世界に誇るべき我が『ハングル』の文字的、音声学的な偉大さを強調することで韓国民族文化の優秀性を宣伝する」計画を立て、前年自ら作成した英文パンフレット『朝鮮語音の万国音声符号表記（The International Phonetic Transcription of Korean Speech-Sounds）』（東亜日報社、一九三五）と朝鮮語の音声学的

考察に関する英語論文二編の他、講演の補助資料として使うために『朝鮮語読本レコード』（オーケーレコード、一九三五）を携えていった。

やがて九月一日に開催されたセッションで司会を務めた中国語の音韻研究の権威カールグレン（Bernhard Karlgren、一八八九～一九七八）の紹介で演壇に上がった彼は、先ず自分が「大会に参加した理由を述べ、ハングルの制定の偉大さと来歴を説明した後、ハングルの母音、子音を紹介した」。それから、「^ガ行を説明し、黒板に張った『平切』を聴衆に発音させた。次に終声の変則、有声と無声、そして合成字母の硬音と有気音の区別について注意を喚起してから、『平切』と幾つかの教材を朗読したレコードを蓄音機で聞かせた後、最後に韓国民謡のレコードを一つかけた」²⁾。

一九二九年に早稲田大学英文科を卒業し、一九三〇年に朝鮮語学

会の会員になって朝鮮語辞書の編纂事業の基礎工事の一つであった「外来語表記法統一案」の起草委員としてハングルの規範化に尽力したこの朝鮮代表は、文芸評論家としても広く知られていた鄭寅燮（チョン・インソップ、一九〇五～一九八三）であった。世界の言語学界にハングルの「優秀性」を説いたのも、朝鮮語の教育レコードを製作して各国の研究者たちにハングルに対する実験音声学研究の必要性を主張して関心を喚起させたのも、朝鮮語学会ではほとんど初めての出来事であった。しかし、にもかかわらず、彼のこのような業績は『ハングル学会五〇年史』（ハングル学会、一九七一）にはほとんど言及されていない。このことについては、本人も不満を吐露しているが、おそらく植民地時代末期に朝鮮文人協会などを主導し国策に協力する国民文学論を展開した彼の親日行為が問題になったものと思われる。そのせいもあってか、鄭寅燮は解放後になると、この三六年のデンマーク行は日本官憲の目を盗んで密かに進められた試みであり、朝鮮語学会事件に連座し投獄された原因ともなった一種の民族抵抗運動として回顧している⁽⁴⁾。

しかし、本稿は鄭寅燮の以上のような主張の真偽を問うことを目的としない。むしろ筆者が注目しようとするのは、彼がなぜハングルの音声学的特質を説明する学術的な場で「民謡のレコード」という音楽メディアを用いたのかという点である。彼はこのことについては具体的な記述を残していないため、その理由は推測の域を出な

いが、「過去の伝承童謡や民謡や俗歌の曲調は、凡そ言葉の自然なアクセントと一致⁽⁵⁾」するという、彼の実験音声学に基づいた見解が反映されたものだったかもしれない。あるいは、一九二三年から朝鮮初の児童運動団体「セクトン会」の同人として活動しながら「子供たちのハングル教育にも留意した⁽⁶⁾」という彼が、自ら童謡を作詞作曲するなど、歌にも高い関心を示していた点が作用したかもしれない。この際、危険を冒してまで参加した国際会議の場で余興を目的に「民謡のレコード」をかけた可能性は無視してもよいだろう。だが、何よりもここで強調したいのは、植民地期朝鮮における言語教育が歌と密接な関係を持って展開されており、この見地からはハングルの言語的特質についての説明と民謡の鑑賞との組み合わせはまったく不自然ではなかったという事実である。これには、後述するように、当時の「唱歌」に代表される歌をめぐる特殊な価値観と共に、十九世紀以降の音声中心主義的な言語認識が深く関わっているように思われる。

もちろん言語教育、特に外国語教育における歌の持つ価値と教育的効果については、ほとんどの子供たちが「ABCの歌」で英語のアルファベットを初めて習うという事実を思い起こすだけですぐ納得のいくことであるが、こうした経験主義的な観点からのみならず、多様な実験などを通して理論的にも長く論じられてきた。言語教育における歌の効用性を追究する研究は、歌が音楽的特性ととも

に言語的特性をも同時に持つている点に注目する。すなわち、歌と言語は共にリズムとメロディーを持つ発声によるコミュニケーションの形態である。しかも歌は一般的に文語表現のみならず口語表現も提供しており、発音・文法構造や語彙・慣用表現を習うのに有用である。また、音楽としての遊戯的属性も具備しているため、学習者の興味を誘発し再現を促すことで記憶を容易にする。それ故に、音楽のメロディーが複雑であつては暗記に困難なため、言語教育に相応しい歌はなるべく音楽的構造が単純でなければならぬ。しかも、このような学習は言語の深層に横たわっている該当の文化に対する理解を深める機会を与えるという付随的な効果も認められている。⁷⁾

以上のように、現在外国語教育の有効な方法として取られている歌唱は、主に言語をあくまでもコミュニケーションの手段としてみなす言語道具観に資する装置として扱われている。そしてこれが活用された例は、すでに戦前の東南アジアの日本軍占領地域で立案された具体的な施行案からも見受けられる。この地域では、植民地朝鮮や台湾で徹底的に強制された「国語」政策とは区別し、現地の固有語をなるべく尊重しながら「東亜共通語」としての「日本語」の普及が図られていた。一九四二年八月七日に提出された南方総軍軍政監部の軍政総監指示には「原住民二対スル日本語ノ普及ニ当タリテハ多少ノ不利不便ヲ認ヒツツ当初ヨリ徹底的ニ日本語ヲ使用シ日

本語ヲ習得セシメ速カニ普及徹底ヲ図ラレ度 此際原住民ノ音楽的才能ヲ利用シ唱歌ノ中ニ日本語ヲ教育スルモ一案ト思考セラル」(傍線は筆者。以下同じ)とある。この資料を紹介した松永典子は、「唱歌により日本語の普及を図らんとする考えが現れているのは、日本語教育の観点から見ると極めて特徴的⁽⁸⁾」と述べている。実際にこの地域では仮名文字を普及させるために「アイウエオの歌」(古閑裕而作曲)が作られ普及されたりしたという。⁹⁾

しかし、占領地の事例のような言語教育における唱歌の活用は、たとえ言語政策の成案として提出されたことはないにしても、日本帝国の「国語」教育でも絶えず意識された。すでに明治時代の学校教育に唱歌教育が導入された際に唱歌が語学を支援し発音を矯正するための手段であることが明確に認識されていた。¹⁰⁾すなわち音楽教育と「国語」教育の接点に置かれたのが唱歌であった。しかも、それは言語道具観に裏打ちされたものとしての機能のみならず、実は言語を民族(国民)精神の精髓とみなす言語ナショナルリズムに資する道具としての積極的な意味をも帯びていた。

日本で近代国民国家の構築に欠かせない構成要素として別個に研究されてきた「国字」としての「国語」と唱歌としての「国歌」を、相互補完的な関係として把握したのは長志珠絵である。長は西欧近代言語学を日本に持ちこんで「国語」の理念を確立した上田万年にとって「国語」の成立とはナショナルなものであると同時に、音

声として秩序づけられなければならない」音声言語主義に基づいたものであった点に注目する。一方、「日本と西洋の折衷」による新たな国歌の創成を目標に伊沢修二により導入された唱歌は、当時国民音楽と見なされていた洋楽を模範としながら渡来すべき「国歌」を内包するものとして理念化された。そのため、「国民」なら誰もが共有できる「一つの言語＝音声」、すなわち音の同一性を志向する「国歌」の構造において唱歌とは、もはや曲を伴う音声として独立して存在するのではなく、「国歌」との関連性の中で補完的な位置に留まるようになったとする。⁽¹¹⁾「国歌」思想の創設者である上田が『新体詩歌集』（大日本図書、一八九五）などに新体詩を書いて国民的詩歌の創出を志向したり、一九一一年から一四年にわたって文部省が編纂した『尋常小学唱歌』の歌詞校閲を担当したりしたことや、唱歌教育の先駆者である伊沢が一八九五年に台湾総督府の民生局学務部長として赴任して台湾で「国歌（日本語）」教育を開始したのは、当時の「国歌」と唱歌が密接な関係を結んでいたことを象徴的に表す事例といえよう。

この点で最近山東功は、近代日本の教育の場における唱歌と「国歌」の相互補完的・連絡的な関係について通時的な観点からさらに詳しい分析を加えている。山東は、伊沢などにより唱歌教育が導入された明治初期には「国歌」教育的な観点から言語的側面が注目されたが、明治中期以降になると、一八九〇年に頒布された教育勅諭

の発想や道徳性を重視するヘルバルトの教育思想などによる徳目主義が強調され、歌詞の内容が重視されるようになったとする。こうした内容の重視は教科統合の思潮と連動して、結果的に唱歌を、簡単な音楽的構造を持つて他の教科を補う暗記用装置へと転落させたと説いた。そして、具体的に歌詞をすべて『尋常小学読本』の韻文から採り国歌教育の補完機能が期待された『尋常小学読本唱歌』（一九一〇）の他にも、修身教育のための『公德唱歌』（一九〇二）、地理教育のための『地理教育鉄道唱歌』（一九〇〇）、文法教育のための『日本文典唱歌』（一九〇二）などを例示している。⁽¹²⁾基本的には近代化という名で国民に均質な音を植え付けようとする際、「国歌」と唱歌が密接な関連性の中で有効な装置として機能しながらも、詳細においては言語的な側面から意味（情報）の伝達という側面に重点が移動したことを読み取った研究といえよう。

ところで、こうした近代国民国家日本における音の均一化に服務するものとしての「国歌」教育と唱歌教育との結合は植民地朝鮮にも見られるのみならず、より一層強力に作動していたのである。それは、母語としての朝鮮語が「国歌」としての日本語に従属される植民地の二重言語状態の下で、非母語としての「国歌」である日本語の学習において、唱歌は日本語習得の手段であると同時に、植民地化のための同化のイデオロギーそのものでもあったからに他ならない。「国歌」習得と密接に結び付けられた唱歌教育は植民地教育

政策の中で体系的に推進されたが、本稿では、先ず普通学校の唱歌教育の内実を明らかにすることで植民地言語政策における唱歌の位相を探り、それとは対比的に存在した朝鮮語教育と朝鮮語唱歌との関係を、当時民間主導でなされた文字普及運動や『朝鮮語読本』レコード製作に焦点を合わせて追究したい。もちろん植民地権力による「国語」教育と民間主導による朝鮮語の普及は抑圧・抵抗という二項対立の構図に還元しきれるものではない。そもそも日本語習得者は一九一九年の時点で全人口の約二％に止まっており、一九三〇年の国勢調査でも七％に満たず、日中戦争勃発後「国家総動員法」が成立して積極的な「皇民化政策」が展開された一九三八年の時点でも一二％に過ぎなかった。「国語」の普及率⁽¹³⁾が低調な中では、植民地権力にとっても動員体制を確立するためには情報（意味）伝達的手段としての朝鮮語の存在は必要不可欠なものであった。したがって、民間側の朝鮮語普及運動は抵抗と協力の交差する地点に立たざるを得なかったのである。ならば、朝鮮内の言語の均一性を志向する「国語」イデオロギーと矛盾する言語現実は、意味と音声に関係付けるシステムとしての「国語」に亀裂を走らせたに違いない。本稿は宗主国日本によって強制された「国語」の共同性が朝鮮語という破裂音を抱えることで内破していく様相を当時の唱歌教育に焦点を合わせて検討する試論である。

ただし、当時の就学適齢期児童の普通学校就学率が一九一〇年代

には五％、三三年にも二〇％に満たず、四二年の調査でも五〇％を越えなかった⁽¹⁴⁾植民地朝鮮においては総督府の唱歌政策の影響力はあくまでも限定的に捉えなければならない。しかし、交通が発達せず文化の流通が不便な当時の朝鮮、特に地方においては音楽の面で学校教育の影響が絶対であったことは認めるべきであろう。住民動員体制が確立していくにつれ、植民地権力と住民をつなぐ結節点としての学校の機能は強くなる一方だったのであり、そこで開かれた音声空間の混交性を観察することこそが本稿の問題関心である。

二、音の規範化

——俗歌、不穩唱歌、教育唱歌、儀式唱歌

先ず、大日本帝国が唱歌を移植して従来の朝鮮の音をどのように規律・統制して植民地の音として秩序化したのかに對して考察してみたい。実は帝国主義列強の侵略に對抗して民族の自主独立と近代国家の建設を焦眉の課題としていた朝鮮開化期の知識人たちにとって、音楽とは一般的に歴史的な課題認識とはかけ離れた閑事とみなされあまり注目されなかった。このことに関しては様々の主張やエピソードが残っているが、当時京都帝国大学の学生だった劉銓（リュ・ジョン）は開化期の音楽を取り巻く状況を「古来我国が文治を尚び孔孟を慕仰し、口先では礼楽を言うも、言が実を符けず、全国に樂器樂書が絶乏し、音楽といえはチャルメラ、どら、鉦などと認

め、唱歌といえは時調、アリラン打令、寧辺歌の類と知り、下等社会の所為で上流人士の学習すべきものではないと排斥⁽¹⁶⁾している。述べ、音楽享受層の極端な分離様相を伝えているところが注目される。劉銓は「移風易俗」という社会的機能を持った儒教的音楽観は形骸化し、声楽でも器楽でも下層の「低級」な音楽が顕著になっている状況を嘆いている。

このような音楽の階級的な分離現象や「低俗」化をめぐる開化期の知識人たちの反応は大きく二つに分かれていた。一つは、アリラン打令、寧辺歌などの俗歌の自生的共同性を生かしそこに国家的な課題を盛り込んで啓蒙に活用しようという動きである。メロディーは生かして歌詞を替える、当時『大韓毎日申報』を中心として活発に展開された替え歌運動がそれである。俗歌の内容を改革して新思想を注入しようという申采浩（シン・チェホ、一八八〇～一九三六）のいわゆる「東国詩界革命」は当時のこのような動きを思想的に支えた言説といえる。しかし、この動きは植民地化を境に水面下に沈んでしまった。一方、これと区別されるもう一つの反応は、「低俗」な在来の音楽を排斥対象とし、それよりもつと進化したものとされた唱歌の普及をはかろうとする動きで、ミッシヨン系の私立学校などを中心に活発に展開された唱歌教育がそれである。

唱歌ということばが公的に用いられた初出例は、一九〇六年八月二七日に公布された「普通教育令施行規則」（学部令第二三号）であ

る。ここで初めて唱歌が随意教科と定められ、教授の要旨が「平易な歌曲を唱えさせ、美感を養い、徳性の涵養に資することを要旨とする。歌詞及び楽譜は平易雅正にして理解し易く心情を快活純美にさせるものを選ぶ⁽¹⁷⁾」と示されている。当時の知識人たちの唱歌に対する認識が窺える資料はこの学部令を受けてのものである。そこには唱歌教育による「国民」という新しい音の共同体が追求されているのみならず、道徳涵養の根本に中国の礼楽思想に基づいた上流階級の従来の音楽観も投影されていた。

唱歌は児童の発音聴音の技能を発達させ、音楽の趣味を養にし高尚純潔な心性を養成し徳性の涵養を計るものである。
（中略）音楽を嗜好するのは人類の通有の天性であり、幼弱な児童と野蛮未開に至った人種さえも歌曲を唱えない者は無い。
また、音楽を聞いて此に感動歓喜しない者は無い。故に歌の其の曲が野鄙淫猥ならむしろ人心を墮落させる弊が少なくないため、高尚優美な歌曲を児童の耳口に錬熟させることが必要であり、音楽の中で学校教授に最も適当なのは唱歌である⁽¹⁸⁾。

朝鮮人として東京高等師範学校を最初に卒業し教育者としての将来を期待されていた張膺震（チャン・ウンジン、一八九〇～一九五〇）は留学時代に大韓帝国での普通教育施行を受けて東京の留学生

団体の機関誌『太極学報』に教授法と教科について説明した論文を発表したが、この文は「唱歌科」にあたるものである。張にとつて普通教育の目的は、国民開化にあり、その中で唱歌は児童の心性を高尚にし徳性を涵養するものとみなされているが、それは強調部分から窺えるように、風俗が善良なら歌謡も善良であり、風俗が墮落すれば歌謡も乱れるという中国の伝統的な歌謡観に裏付けられている。だが、このような認識は、実は日本の唱歌教育を創設した伊沢の唱歌観などを踏まえたものである。

凡ソ教育ノ要ハ、徳育、智育、体育ノ三者ニ在リ。而シテ小学ニ在リテハ、最モ宜ク徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスベシ。今夫レ音楽ノ物タル、性情ニ本ヅキ、人心ヲ正シ、風化ヲ助クルノ妙用アリ。故ニ古ヨリ明君賢相特ニ之ヲ振興シ、之ヲ家國ニ播サント欲セシ者、和漢欧米ノ史冊歴々徴スベシ。¹⁹⁾

これは伊沢の建議で唱歌教育のために設立された文部省所属の音楽取調掛で初めて編纂した『小学唱歌集初編』（一八八一）の「緒言」の冒頭であり、伊沢自身によつて書かれたものである。ここで伊沢は小学教育における徳性涵養の重要性を主張し音楽による風化の効用を挙げている。すなわち、唱歌とは、理念上は儒教の伝統的な礼楽観を受け継いだものであった。張の主張以降の唱歌をめぐる

言説がほとんど伊沢のこうした唱歌観に基づいているのは、それが西洋のメロディーをほとんどそのまま借用しているにもかかわらず、東洋の儒教的音楽観を援用しており、いわば片足を深く伝統的な普遍世界に置いていた点に共感を覚えたことによる可能性が高い。それは前掲の劉銓の文章からも確認できる。劉銓は、「米国は独立思想と愛国心がすべて音楽の能力だといつて、国民教育に音楽を最も必要な科目」としているため、「これを倣う者が多く、我が国も（中略）文明列邦で流行する楽器楽書を輸入し、古代聖賢の使用した楽器楽典を参酌・教授することで同胞の愛国心と活動力を感発し国勢を挽回し思想を高尚にすることを希望」と述べ、独立精神と愛国心からなる国民精神を振作させる効能を持った音楽を新たに作るためには欧米の音楽の輸入は勿論、中国の聖賢の礼楽思想も斟酌しなければならぬと説いたのである。

そして、音楽と人間の気質の間の関係を「長音階は文明列強で普通使つており、此の曲調は人の勇氣と活動力を養成する。短音階は古より亡国で多く使用された曲調であり、人の悵感と悲哀心を發生させる故に、今日の音楽界でその使用を許さない²⁰⁾」と主張している。劉が長短音階と人間の気質の関係を儒教的な礼楽思想に基づいて想定したのも、実は「長音階の旋法に属する楽曲は勇壯活潑にして、其快情実²¹⁾に極りなし。之に反して、短音階の旋法に属するものは柔弱憂鬱にして、哀情の甚だしきものとす。（中略）是故に欧米の各

国、其唱歌を学校教科に充つるや、皆此長音階を採りて短音階を捨つ⁽²¹⁾とする伊沢の主張をそのまま移したものと見える。

あるいは、植民地時代に入ってから総督府により「不穩唱歌」として弾圧を受けて没収された、尹致昊が経営した開城の韓英書院で発行した『唱歌集』(一九一四)の序文にも以上の例とほぼ同様の唱歌観が説かれている。

国家の興亡盛衰は国民の精神に在る。国民の精神を感発させるのは歌が最たるものである。それ故、欧米諸国ではすぐれた詩人、音楽家のすばらしい詩や歌曲によつて国民の精神を涵養させた。わが海東の祖国は古来、歌曲がなくはないが、その意味が大概淫蕩放逸に流れないものがなく、わが大韓の志人、仁者が一様に遺憾とするところである。⁽²²⁾

在来の音楽をその「低俗」さを挙げて排斥することや、唱歌を国民精神の涵養の手段と捉え、それを裏付けるものとして儒教的な音楽観を持ち出す点などは、日本由来の唱歌観の系譜を引くものとみられる。このように当時の唱歌は日本の初期の唱歌教科書と同じく欧米の民謡のメロディーにハングルの歌詞を付けたものであり、唱歌に対する認識も日本と類似していた。つまり、開化期の朝鮮で唱歌の価値を決めたのは、西洋のメロディーと近代の国家的課題、要

するに愛国啓蒙と自主独立にふさわしい内容を記した歌詞であった。したがって、植民地権力の統制は唱歌のメロディーや唱歌観にではなく、ひたすら歌詞に盛り込まれた国民精神の内容に及ぶものであった。

韓英書院の『唱歌集』が禁止処分を受けた理由は、学生たちに「排日思想の養成に一助する国権回復の唱歌」を斉唱させたことにあったが、朝鮮で歌われる唱歌に対する日本の抑圧は、実は統監府時代から存在した。統監府時代にはすでに「教科用図書検定規定」(一九〇八)と「出版法」(一九〇九)により私立学校で使用される教科書に対する検閲が加えられており、一九〇九年からは「不穩当な唱歌」を禁止せよという訓則が度々発令され、「時局に係る唱歌」や「深く愛国する唱歌」が嚴禁されたのである。⁽²³⁾以降、植民地時代を通じて反日思想や民族独立、階級意識などを鼓吹する唱歌は徹底的な弾圧を受けており、学校でこのような「不穩唱歌」を教授して逮捕される事件は当時のメディアに散見する。

一方、統監府は「不穩唱歌」の禁止から一歩進んで直接唱歌集を編纂し学校教育の場に散布した。学部で一九一〇年五月に発行された『普通教育唱歌集』(以下、『学部唱歌集』)がそれであるが、編纂中もその意図が言論界に公開され、朝鮮には「原定された音楽教科書がなく、俗歌と校歌などは少しあるものの、歌曲が楽器に合わない⁽²⁴⁾」⁽²⁴⁾といって、発達した西洋楽器に合わせた朝鮮音楽の体系化・近

代化を建前としてはいた。しかし、「学部では各官公私立学校の唱歌が統一されていいのみならず、過激で激動的な意辞が多いといった近日新唱歌集を編輯中⁽²⁵⁾」と報道されているように、真の目的は「排日の文字」をとり除いた唱歌集を通して朝鮮内のすべての学校の音を規範化し統一するところにあつたのである。この唱歌集の「例言」には「本書は普通学校、師範学校、高等学校其他一般の諸学校で教授する目的で編纂」したとある。その外にも「学校で教授するのみならず、家庭で使用することも」可能だと述べられており、学校の場合を越える唱歌の歌としての伝播性も念頭に置いている。

ところが、植民地期に唱歌の権威を決めたのは何よりも大日本帝国の「国民精神」の精髓としての「国語」日本語で書かれた歌詞にあつたことを思い起こせば、『学部唱歌集』と総督府編纂の唱歌集との間には明確な断絶がある。というのも、この唱歌集に収録された唱歌はすべてハングルになつており、時局的な歌詞はないものの、日本色もあまりなく教訓的な内容が主流を占めているからである。⁽²⁶⁾特にハングルの使用に関しては、一九〇八年七月に学部で官公立普通学校の教監らが直接音楽教育政策を議論した「第二回官公立普通学校教監会議」（参加者は全員日本人）でも明確に確認されている。この会議で協議された案件中音楽教育と関連を持つのは「唱歌科ヲ必須科トシ学部ニ於テ歌詞ヲ選定スル件」であつた。排日思想を防ぎ歌を統一するなどの国民教育の必要上、唱歌科を必須科にす

ることに原則的に全員賛成しているが、この時歌詞はハングルであるべきことが再三強調された。⁽²⁷⁾これは、『学部唱歌集』刊行時までは統監府は唱歌を通して朝鮮人の生活倫理や感性などを均質化することに焦点を合わせることで、あまり大きな抵抗なしに時局に対する関心や反日情緒を逸らそうとしていたことを伝えている。この会議では朝鮮人の俗歌などを採録しようという見解も提出されており、『学部唱歌集』に「月よ月よ明るい月よ⁽²⁸⁾」で始まる民謡の歌詞を付けた唱歌〈月〉（原曲は納所弁次郎作曲へおつきさま）が収録されていることも、このような見解が共有されていたことを窺わせる。しかし、こうした路線は植民地期以降になると、全面的に修正される。

総督府は一九一一年に「忠良なる国民を育成」することを最大の目標にする朝鮮教育令を公布し、朝鮮人を言語的・文化的・思想的に「日本人化」して忠君愛国の心性を養おうとする同化政策を推進した。そして日本語は国民精神の精髓である「国語」として普通学校の教育で最も比重が置かれて学生たちに強制された。唱歌は第一次朝鮮教育令期（一九一〇―一九二二）までは選択科目であつたが、「国語」の普及率が低調であつたため、唱歌は朝鮮人の同化のための有力な手段として機能しながら「国語」の持つべき音の共同性の空白を補つたものとみられる。例えば、言文一致唱歌の創始者として知られており、『朝鮮唱歌』（富山房、一九一一）を作曲して韓国併合の「偉業」を謳頌した同化論者でもあつた田村虎蔵も「大和言

表1 統監府・総督府編纂唱歌集のハングル曲と儀式唱歌の推移

		普通教育唱歌集	新編唱歌集	普通学校唱歌書	普通学校補充唱歌集	初等唱歌 みくにのうた	ウタノホン 初等音楽
使用時期		1910～	1914～	1920～	1926～	1939～	1942～
全曲数 ハングル曲数／	一年	27 / 27	6 / 41	8 / 20	6 / 10	0 / 25	0 / 21
	二年			0 / 19	6 / 10	0 / 25	0 / 22
	三年			0 / 23	3 / 10	0 / 25	0 / 28
	四年			0 / 23	2 / 10	0 / 25	0 / 28
	五年				3 / 10	0 / 25	0 / 29
	六年				1 / 10	0 / 25	0 / 29
儀式唱歌数	一年			1(①)	0	11	1(①)
	二年	0	6(①～⑥)	2(①④)	0	(①～⑪、	2(①③)
	三年			6(①～⑥)	0	『みくにの	6(①～⑤⑦)
	四年			6(①～⑥)	0	うた』収録	6(①～⑤⑦)
	五年				0	曲)	7(①～⑤⑦⑬)
	六年				0		7(①～⑤⑦⑬)

①君が代、②一月一日、③紀元節、④天長節、⑤勅語奉答、⑥卒業式、⑦明治節、⑧神社参拝唱歌、⑨海行かば、⑩仰げば尊し、⑪愛国行進曲、⑫金剛石、⑬明治天皇御製

葉を附したる新旋律をして、彼の一千二百万人に謡歌せしむることは、「新国民を同和せしむ上に於て、吾人は最も有力なる手段の一なりと信ず⁽²⁹⁾」と述べている。実際、『学部唱歌集』は「歌詞皆朝鮮語にして、唱歌科教授には極めて不便⁽³⁰⁾」だとされ、新しい唱歌集が総督府によって刊行されたが、それが『新編唱歌集』(一九一四)である。

『学部唱歌集』に比べ『新編唱歌集』のもつ最大の特徴は、表1からわかるように、収録曲のほとんどが(i)日本語であるという点と(ii)「君が代」を含めたいわゆる「儀式唱歌」が登場したという点である。そして(iii)「儀式唱歌」には歴史的仮名遣が、一般の唱歌には表音的仮名遣が用いられており、低学年用は片仮名表記、その上は平仮名表記の口語体、高学年用は文語体になっているが、この三点は以降の総督府編纂の唱歌集に受け継がれる模範になった。

(i)に関しては、『新編唱歌集』やこれに次ぐ『普通学校唱歌書』(一九二〇)にはまだハングル曲が少数ながら残っている⁽³¹⁾。しかし、一九二二年九月に発生した霊岩公立普通学校の学生たちの同盟休学を伝える『東亜日報』の社説「朝鮮語唱歌と朝鮮歴史の教授」を参照するかぎり、朝鮮語唱歌は学校教育ではほとんど奨励されなかったことが窺える。この事件は地方の普通学校の学生たちが「朝鮮語唱歌と朝鮮歴史を教授しないこと」などを理由に同盟休学

を敢行したものである。社説はこの事態を「現下の朝鮮教育制度の欠陥を根本的に遺憾なく露呈した、極めて重大な事件」とみなし、「その情が動じ、その動ずる情によって自然の語として自然に流暢にその情を發表できない朝鮮少年の胸底は、まるで啞者のそれと同じ」であると述べた後、当局に向けて「我が朝鮮少年にその父母の言語をもつて、その母乳とご飯とともに生長した自然の言語をもつて歌い唱えることを許し、かつ歌い唱える機会を作れ」と訴えている⁽³²⁾。当時日本語による音の共同性が学校の場合を通していかに徹底に推し進められたかを窺わせる事件である。このような学生たちの集団行動や言論の批判は従来の武断統治政策に対する部分的な修正をもたらし、三・一運動によって活性化された世論を反映したものと見える。このような朝鮮語唱歌への希求は、二〇年代の童謡の黄金期を牽引した「セクトン会」の機関誌『オリニ（子供）』（一九二三年三月）の誕生と一九二三年から開始された各新聞社の童謡懸賞募集に投影されていき、何よりも総督府による唱歌集の補完作業を促した。

三・一運動は教育政策にも変化をもたらし、一九二二年に改正された「朝鮮教育令」では、いわゆる「内地延長主義」に基づき「内地」との差別が部分的に是正され、内鮮融和という名目で朝鮮にかかわる事象を教科書に載せるようになった。普通学校も六年制に変わったため、従来の教科書の改訂補完は緊急を要する事柄でもあつ

た。これにより従来の教科書の補充教材として作られたのが「普通学校補充唱歌集」（一九二六、以下『補充唱歌集』）である。これは「童謡運動」に代表される朝鮮人の朝鮮語唱歌への希求を植民地権力が取り入れる形でなされた歌詞の懸賞募集を通して朝鮮人の作品も収録したものである。第二次朝鮮教育令期に存在した「国語」の共同性に加えられた破裂音に関することは後述する。ただし、本節では『補充唱歌集』には朝鮮語唱歌が大幅に採られていることと「儀式唱歌」が載っていない点を強調しておく。しかし、これがあくまでも『普通学校唱歌書』や小学校の教材であつた『尋常小学唱歌』などの補充教材であつたという点も見逃してはならない。

(ii) の「儀式唱歌」は軍国主義的な忠君愛国の国民精神を育成する代表的な唱歌として大日本帝国が決めた記念日に斉唱することが強制されたが、一九一五年に「不穩唱歌」の温床とされた私立学校に校歌を直し記念日の儀式当日に「君が代」を斉唱するよう通牒した「官報」⁽³⁴⁾から窺えるように、それは植民地の音を秩序付ける象徴的な唱歌であつた。しかも、一九三七年の日中戦争をきっかけに突入した戦時体制に合わせて「忠良なる皇国臣民の育成」を目標に改正された第三次朝鮮教育令（一九三八）以降になると、朝鮮語が必須課目から除かれ朝鮮語唱歌も排除されるなど、学校における音の統一が一層加速化した。たとえば、歌詞の難解さゆえに総督府が別途に作った「紀元節」の歌詞は「国民精神の振作を期し、内鮮一

体の実績をあげ」るために文部省制定の曲を採択し「内地」と統一させたり、国民の戦意高揚のために一九三七年に製作され第二の国歌とまで称えられた〈海行かば〉を〈君が代〉とともにすべての儀式で斉唱させた⁽³⁵⁾。しかも、一九三九年には小学校の唱歌集から儀式唱歌のみを独立させて内容を図った『みくにのうた』が発行されたが、これは日本の唱歌教科書ではなく植民地朝鮮にのみ編集・普及されたものである⁽³⁷⁾。

朝鮮語科目が完全廃止された植民地末期（一九四一年「国民学校令」に入ると、たとえば生徒たちは校門を出て戦勝祈願の提灯行列を作って村内を練り歩いたり、村民は戦勝記念行事のために学校に動員されたりして、学校を媒介とした「国民精神」の総動員が敢行された。そこでは意味を剝奪された唱歌・軍歌が斉唱されることにより「国民」の音の共同性が演出されたのである。

三、「国語」と唱歌の連絡 ——教科統合教育と芸術教育運動

初等教育における唱歌科は伊沢により教科目として導入された初期から音楽教育としての自律性よりは、児童の興味を誘発し学習効果を高め徳性を涵養するのみならず、発音を矯正し標準語音を訓練させるなどの補完機能が重視された教科であったことはすでに触れたとおりであるが、本節では特に植民地期朝鮮における「国語」科

との関連性をより詳細に見ていきたい。

教科統合論的な観点から唱歌科と国語、修身などの他学科との連絡を強調したのは、すでに大韓帝国末期の劉銓も前掲文で「各学校に於て音楽を教授するのは各学科を連絡して教授学上及び心理学上に直間接に大変関係が有る」⁽³⁸⁾ためと指摘している。統監府の日本人官僚たちにもこのような認識が存在したことは、先に引用した学部で唱歌教育を議論した一九〇八年の教監会議で「（普通学校学徒用）国語読本」（一九〇七、以下『学部国語読本』）中二韻文交りアルヲ以テ之ヲ材料トナス」⁽³⁹⁾べきことが提案されていることから窺える。これを受ける『学部唱歌集』（一九一〇）には二七曲中〈紙寫とこま^{과편이}〉〈時計〉〈蝶〉〈移秧〉〈学問歌〉〈漂衣〉〈善友〉の七曲が『学部国語読本』から採られたか、若干の改訂を加えたものであった。唱歌科は国語科と結び付けられ連絡統合学習の形での補完的な機能が期待されたのである。だが、この補完的な機能は植民地期に入るとより一層徹底されるようになった。

まず、歌詞の表記は、低学年用は口語体、高学年用は文語体が取られており、総督府で編纂されたすべての唱歌集には読本との統一性が保たれている⁽⁴⁰⁾。そのみならず、内容においても「国語」科との連絡関係は明白である。まず総督府が初めて刊行した『新編唱歌集』（二九一四）には全部で四一曲が収録されているが、その中で特に儀式唱歌は修身科、国語科にも関連の内容が載せられており、

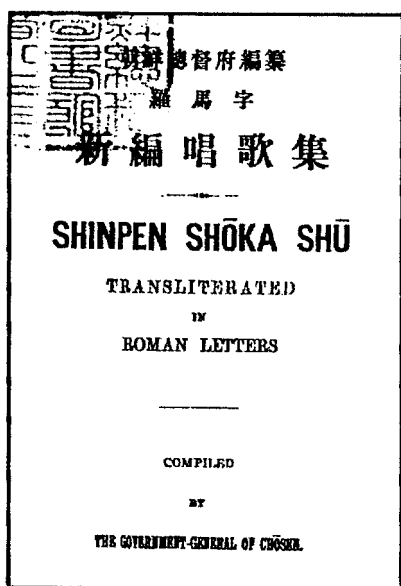


図1 新編唱歌集

緊密な連絡関係を成している。⁽⁴¹⁾その他に〈お月さま〉〈タコ〉〈日ノ丸ノ旗〉〈モモタロウ〉〈サクラ〉〈花咲爺〉〈時計〉〈富士山〉〈春が来た〉〈子馬〉〈田植〉〈あさがお〉〈菊〉などの一三曲は『普通学校国語読本』(一九二二五)から歌詞を採ったか関係のある曲であり、〈正直〉〈三宮金次郎〉〈職業〉〈勤儉〉などの四曲は『普通学校修身書』(一九一四)と関連がある。〈運動会〉〈養蚕〉〈勤儉〉〈職業〉〈師の恩〉は『普通学校朝鮮語及漢文読本』(一九一五八、以下『第一次朝鮮語読本』)と連絡している。〈養蚕〉は『普通学校農業書』(一九一四)とも関連があり、この中で〈養蚕〉〈勤儉〉〈職業〉などは日本では確認されない唱歌の例である。

いわゆる「簡易実用」を標榜した一九一〇年代における普通学校の大凡の教育課程が植民地支配イデオロギーの教化のための科目と

しての修身と「国語」、そして算術及び低級の職業教科である農業初歩、商業初歩などであったことを考慮すれば、以上のような事実は『新編唱歌集』がこの時期の教育課程を網羅した教科統合的な教材であったことを物語っている。一方、〈月〉⁽⁴²⁾以外はすべて日本語唱歌を翻訳したものである朝鮮語唱歌と第一次『朝鮮語読本』との間の関連性は見受けられない反面、特に「国語」科との関連が密接なのである。このことはこの唱歌集が日本語音の訓練のみならず唱歌の斉唱を通して音の共同性を演出し児童の脳裏に共通の「国語」像を植え付ける役割を担っていたことが推測される。

この推測は、一九一五年に総督府で『羅馬字新編唱歌集』が刊行されたことから首肯できる。この唱歌集は『新編唱歌集』をそのままローマ字に直したものであるが、『官報』の「教科用図書発行」の広告には『普通学校修身書 生徒用(諺文訳)』『普通学校農業書朝鮮訳文』『羅馬字新編唱歌集』などの三種に対し、「私立学校中国語ニテ教授シ難キ学校ニ限り使用スベキモノ」とする注記が付されている。⁽⁴³⁾「普通学校規定」の適用を受けない私立学校は総督府の弾圧により一九一五年から学生数の比率が普通学校に逆転されてしまったが、依然「不穩勢力」の温床として早急な教化が必要な対象であったことは先述した通りである。上記の教科用図書中の前の二者は朝鮮語を通しての修身の浸透、職業教育の徹底を期しようとする内容伝達を主眼として朝鮮語に訳して提供された教材であるこ

とがわかる。ところが、『国語読本』の翻訳版がないということは「国語」が内容（意味）の伝達に目的のある教科ではないことを窺わせる。『国語読本』の空白を埋める『羅馬字新編唱歌集』がローマ字表記を採用したのは言語の音声表記を徹底するとの趣旨からなのであるが、そのような観点からみて、このローマ字本の刊行は『国語読本』に代わって音声言語としての日本語の広範な浸透を念頭に置いた措置であつたと捉えることができる。このことから徳性の涵養とはすなわち国民精神の陶冶を意味し、「国語」とは国民精神の精髓とみなすこの時代の言語認識が唱歌科のこうした統合学習的な性格の教材にも反映されていることがわかる。

唱歌科の以上のような教科統合の傾向は『新編唱歌集』に次ぐ『普通学校唱歌書』（一九二〇）になるとさらに深化する。『普通学校唱歌書』は初めて学年別に編纂されたため、『新編唱歌集』を受け継ぎつつも歌曲数を増やさなければならなかった。新たに収録された歌曲を見ると、主に小学校の教材である『尋常小学唱歌』から採った曲が多い。その他の新曲の中で特筆すべきなのは、朝鮮にかかわる唱歌が明らかに増えている点である。『国語読本』と関連のある〈京城〉〈金剛山〉、〈修身書』と関連のある〈鄭民赫〉、『朝鮮語読本』と関連のある〈燕〉（興夫伝）、その他〈鴨緑江〉（『高等国語読本』）〈牡丹台〉〈釜山港〉がそれである。これは三・一運動以降朝鮮の民心を懐柔するための方便として朝鮮の自然や朝鮮人の生

活、文化などを教科書に取り入れ秩序づけようとする企てと関連があるう。しかし、朝鮮語唱歌は二曲しか増えていないし、曲そのものも日本語唱歌を翻訳したものに過ぎなかった。『朝鮮語読本』と朝鮮語唱歌との連絡は相変らず考慮されておらず、朝鮮語でできた朝鮮人の唱歌を取り入れようとする意思もまったく見受けられない。

しかし総督府主導の唱歌教育はこの時期、実は深刻な危機に直面していた。すでに日本で一九一〇年代のデモクラシーに対する関心の高揚と児童中心主義・個性尊重の芸術教育思潮の影響などにより、伊沢以来の徳性涵養Ⅱ国民精神の注入を目的とする露骨な教訓ないし知識を教える功利的な唱歌観に対する批判が行われ、美的情調の涵養を目的とする芸術教育が民間運動として展開されていた。こうした運動と相乗効果を発揮しながら大きく起こったのが、政府主導の学校唱歌や説話に対抗して、雑誌『赤い鳥』（一九一八）を中心に児童の純粋性を育てるための話や歌を創作して世に広めようとした童謡運動であつた。この運動は学校唱歌が抑圧・排除した伝承童謡・民謡にも関心を向け、これらの伝統を受け継いで日本国民音楽を創造しようという動きにもつながっていった。しかも、この運動は朝鮮の子供のための朝鮮語唱歌を希求していた当時の朝鮮にも多大な影響を及ぼし、朝鮮の知識人たちに（伝承）童謡や民謡の蒐集・研究という学問的な関心を喚起させたのみならず、『オリニ』などのメディア空間を中心に展開された童謡創作運動をも触発した

表2 募集広告採用数

	朝鮮語	日本語
一学年用	0	0
二学年用	3	0
三学年用	4	0
四学年用	4	2
五学年用	2	7
六学年用	0	8
合計	13	17

表3 教材採用数

朝鮮語	日本語
0	0
3	4
3	1
1	5
2	3
1	6
10	19

のである⁽⁴⁵⁾。実際に多くの人々が新聞や雑誌の読者欄に童謡の歌詞を投稿しており、「セクトン会」を中心に作曲も多数発表されて人気が集めていた。朝鮮における童謡運動は反「学校唱歌」の風潮がそのまま朝鮮語唱歌創作運動につながる地点に立っていたのである。総督府は朝鮮内外のこのような権力への抵抗的要素を持つ反「唱歌」の動きに対し、完全に新しい方式による新しい唱歌集の発行を推進することで民間を中心とした動きを吸収・統合しようとした。すなわち、『普通学校補充唱歌集』（一九二六）の歌詞懸賞募集に朝鮮人の参加を促そうとしたのである。『朝鮮日報』の関連記事を見れば、朝鮮教育令改正で普通学校が六年制になったことにより当時の小学校教材である『尋常小学唱歌』を使用するようになったが、

ここには「朝鮮的な教材が全く無く、授業上遺憾な点が少なくない」⁽⁴⁶⁾ため、総督府で補充教材を編纂することになったとその意図を伝えている。一九二三年一月二九日付の『官報』には新たに編纂する普通学校教科用唱歌の歌詞募集の広告が載っている。その募集規定には題材として「朝鮮ノ童話、童謡、伝説、史伝、教訓、名所、旧蹟、実業其ノ他朝鮮的題材ニシテ普通学校児童ノ興味ヲ喚起スルニ足ルモノ但シ普通学校用修身、国語、朝鮮語等ノ教科書中ヨリ朝鮮的教材ヲ選ヒテ歌詞ニ作ルモ妨ケス」⁽⁴⁷⁾とある。修身や実業教育関連の題材も相変らず含まれているものの、朝鮮的なものを範疇化して整理しようとする意図が見うけられる。『官報』に提示された採用数は表2のようである。

表3は懸賞募集で採用された曲中に実際に新しい唱歌集に収載された曲数を示したものであるが、最終的に朝鮮語と日本語の採用割合はほぼ一対二に調整されていることがわかる。この割合は『補充唱歌集』全曲中の朝鮮語と日本語の割合（二二曲対三九曲）とほとんど一致する。しかし、前掲した表1からわかるように、低学年を中心として朝鮮語唱歌をたくさん採用した点は従来に比べて画期的な措置であったことは間違いない。

こうして『補充唱歌集』には従来の『普通学校唱歌書』に収載された朝鮮に関する唱歌（上記の七曲）に加え、懸賞募集により〈長煙管〉〈白頭山〉〈鶏林〉〈高麗の旧都〉〈百済の旧都〉〈成三問〉〈昔

脱解〉などが追加されるようになった。ところが、この朝鮮的とされる唱歌のほとんどは日本語でできている。朝鮮語のものは〈兎토끼ご고つ느こ음〉〈遅刻はやめよう〉〈余業の滋味〉〈学배우ぶ海바다〉などのように、児童の生活や遊戯とかかわるものがほとんどである。児童の興味を喚起させるために採用された朝鮮の歴史や地理、風俗などが、実は教科書の中で秩序付けられ管理されるものであったことは歌詞が採用している言語にも端的に現れているといえよう。一方、第二次『朝鮮語読本』の韻文教材である〈こま팽이〉〈蝶나비〉〈水車물방아〉〈休휴み학のお別작별れ〉が朝鮮語唱歌として収載されており、初めて両教科間の連絡関係が結ばれたという点からもこの唱歌集は注目に値しよう。

しかし、これは朝鮮人たちの朝鮮語唱歌への需要を満たすにはあまりにも物足りなかったといわざるを得ない。すでにこの唱歌集発行の同じ年である一九二六年には朝鮮初の童謡集と称される尹克栄の『半月반달』が刊行されレコードにまで吹き込まれていたし、二九年には洪蘭坡（ホン・ナンパ、一八九七～一九四一）の『朝鮮童謡百曲集』、丁淳喆（チョン・スン Chol）の『童笛자랑피리』などが公刊され、童謡作曲家たちを中心に童謡運動がより一層活発になっていった。しかも、ちょうど同じ時期に開始されたラジオ放送は一九三三年から朝鮮語専用の第二放送を実施してから創作童謡を放送するようになり、その全国的な同時性と広播性から童謡の普及に至大な影響を及ぼした。⁽⁴⁸⁾植民地の統治機構としての性格を持つ放送メディアも、植民地

の検閲体制にその存廃を左右されなければならなかった出版メディアも、この時期には共に大衆の嗜好に應じる大衆メディアとしての性格をも強く帯びていたため、その植民地近代性の矛盾の作り上げた躍動性⁽⁴⁹⁾が朝鮮語唱歌としての創作童謡の全盛期を作り出したのである。このような躍動性は教科書の編纂に反映されたりもした。朝鮮総督府の検定を受けたものではあるが、一九三五年に京城師範学校音楽教育研究会が編纂した『初等唱歌』（全六冊）には一学年用から三学年用までは各三曲、四学年用に二曲、五学年用に一曲の朝鮮語唱歌が収載されており、すべて〈お正月설날〉〈虹무지개〉などと当時の創作童謡であった。しかし、朝鮮語唱歌を求める享受者たちの多様な声は、日中戦争以降皇民化政策がより一層強化される中で暴力的に終熄を迎えさせられた。

一九三八年の第三次朝鮮教育令改正により朝鮮語が選択科目へと転落し朝鮮語唱歌も排除されることになり、学校における音の統一は加速化したことは先述した通りである。これを「標準となるべき教科用図書がな」く、唱歌教授法が千差万別に乱れているため、内鮮一体、皇国臣民の育成という時局的課題に答えて総督府が新たに編纂した⁽⁵⁰⁾という教科書『初等唱歌』（一九三九～四一）の例から確認してみたい。

実は、この唱歌集は上記の『補充唱歌集』と同じように懸賞募集による歌詞を収載する形を採っている。ハングル新聞に載った唱歌

表4 採用者の民族別数

	採用曲数	朝鮮人	日本人
一学年	7	2	5
二学年	8	4	4
三学年	5	3	2
四学年	3	2	1
合計	23	11	12

募集の広告を見ると、「改正された新しい教育令の趣旨に従い小学生たちの唱歌を通して皇国臣民の精神を養うために」小学唱歌用歌詞を全鮮の小学生たちから募集することにしたが、「その歌詞は実生活に適合するものにし、児童たちに日常生活と精神教育の統一された感激を与えようというのが」募集の主眼であることを明らかにし、歌詞内容の方向性を限定している。⁵¹⁾一・二学年用は一九三八年に、三・四学年用は三九年に行われたこの懸賞募集は、応募者を小学生に限定した点、新しい教育令により小学校と普通学校との区別

が廃止された関係で日本人児童も応募に参加した点、すべての歌詞が日本語である点、そして「第一学年用は春、私は、一年生」などのように応募段階で題目を限定した点などにおいて『補充唱歌集』のそれとはかなり異なっているといえる。

表4からわかるように、ほぼ同数の朝鮮人児童と日本人児童の日本語歌詞が採用されている。そしてその歌詞の内容は、例えば三学年用の採用曲〈栗ひろひ〉に「茶色の大きなこの栗で／晩にはおいしい栗ごはん／軍歌うたつ

て帰らうよ／重いふくろを皆下げて」とあるように、「児童たちの日常生活」が「皇民化」という国家の論理と融合している。このような点からみても、この歌詞募集は「下から」の児童生活の収斂というより、むしろ朝鮮人児童が日本人児童といっしょに皇国臣民としての意思を日本語で潑刺と歌わなければならないとする「上から」の強制を、まるで募集の結果による自然なものとして装うための装置に過ぎなかったといわざるをえない。唱歌集の「緒言」に「本書ハソノ編纂ニ当リ、皇国臣民タルノ情調涵養ニ適切ナル唱歌ノ採択ニ留意セリ」と記されているように、採用曲以外の収録曲にもこのような傾向は著しい。また、従来の学校唱歌集に比べて朝鮮にかかわる内容の唱歌がほとんど載っていない反面、〈揚子江〉〈北満の野〉〈万里の長城〉などの中国大陸を題材にした曲が目立つようになったのも大陸侵略という国策を唱歌によって児童たちの脳裏に焼き付けようとしたことが窺える。

一九四一年に発刊された五学年用と六学年用の『初等唱歌』は、同じ年に公布された国民学校令に基づき唱歌科が「芸能科音楽」に変わるなどの急変する教育改編の中で、懸賞募集の形は取れなかったものとみられる。この時期からは音楽教授において歌唱と鑑賞の基礎になる発音と聴音の訓練が特に強調されるようになった。それは音楽科が総力戦体制下の軍事訓練の補完機能とみなされたことと関連がある。総督府が時局の変化による教材の改編のために発行し

た『教科書編輯彙報』には「音楽に於ける歌唱は歌詞即ち国語を取扱ふものであることを忘れてはならない」とあり、特に国語科との連絡を強調して「本科目に示された『正シイ発音』といふ基礎演習は『耳ノ訓練』と共に直ちに国語科目の基礎演習となるやうにしなければならぬ⁽⁵³⁾」と述べられている。このような音楽教育はそもそも意味と音声に関係付ける言語システムとしての「国語」から音声のみをあまりにも強調するものであったといわざるを得ない。従って、初等教育の一元化により朝鮮内のすべての児童に適用された発音や聴音を強調する音楽教育は日本語を母語としない朝鮮人生徒たちにとっては音の統制と抑圧以外の何ものでもなかったはずである。

四、歌う文字普及運動

以上、植民地期朝鮮の「学校唱歌」は支配イデオロギーを宣伝する道具であると同時に、「国語」としての日本語教育を文体・内容・発音などの側面から補完しつつ「国語」の同一性を音声的に演出する装置として機能する一方で、「上から」の「国語」の強制とは裏腹に朝鮮語唱歌の教科内における位置や朝鮮語科との連絡関係はほとんど確保されなかったことを確認した。朝鮮語科さえも「継子扱い」をされて「あまりにも他の学科より軽忽に扱う」風潮⁽⁵⁴⁾が次第に固定していく中で、学校での朝鮮語唱歌の足場はさらに悪くなる一方であった。

ところが、朝鮮語教育と朝鮮語唱歌ないし歌との関連は学校以外の場所では結ばれた。すなわち、一九二〇年代後半から三〇年代中盤まで朝鮮日報社と東亜日報社がそれぞれ農村啓蒙運動の一環として独自に展開した文字普及運動の場ではハングル普及とかかわって歌が大きく活躍していたのである。

一九二九年から一九三四年まで四回実施された朝鮮日報社の文字普及運動と、一九三一年から一九三四年まで四回実施された東亜日報社のヴ・ナロード運動は、それぞれ「知は力、学ばなければ生き残れず」と「学ぼう！教えよう！みんなでヴ・ナロード!!」というスローガンを掲げ、学校の休み中に帰郷する男女学生たちを動員して展開された民族啓蒙運動であったという共通点を持っている。すなわち、この運動は「朝鮮民族の九割を文盲のままにしておくことは文明人としての一大恥辱」であり、このような文盲を退治しなくては「民族の平等な権利を云謂することは、ある大きい不足を感じるの⁽⁵⁵⁾」だと説いた『東亜日報』の社説に端的に示されているように、農村の現実を規定する植民地の搾取構造という根本問題には口をつぐんだまま、民族的劣等感を強調して実力養成のみを早急な課題として強調した。その結果、同じ時期に総督府が展開した「農村振興運動」にも、読者網の拡大という新聞社の利潤追求にも符合する事業であったとする批判は説得力がある。しかし、学校という制度の外で学生たちによって行われた民族語教育は、近代啓蒙という事業

の初発の意図から離れ民族抵抗的な性格へと発展していく可能性も内包していた。運動の中心に存在するハングルが民族精神の象徴として認識される限り、この運動は皇民化の実現のために情報（意味）の効率的な伝達を目的に推進された総督府の一連の朝鮮語奨励策とは異なってくる。民族語としてのハングルは、「文字と算数以外は何もこの運動に混ぜないこと」という新聞社の再三の「注意」にもかかわらず、「不純物」を引き入れる吸引力を持っていたのである。その「不純物」の中には歌があった。

両新聞社の文字普及運動は参加学生たちの体験記を新聞に連載したという点でも共通しているが、学生たちが明らかにする講習内容は、上記の「注意」にも強調されているように、ハングルと算術が中心であった。各新聞社が発行した文字普及の教材も、朝鮮日報社の場合、『ハングル原本』と『算術教材』があり、一九三四年にはこの二つを合本した『文字普及教材』を発行している。東亜日報社の場合も『ハングルの勉強』（一九三二）と『日用計教法』（一九三三）が用いられた。⁽⁵⁸⁾ところで、体験記によれば、学生たちは児童たちを文字普及班に集めて興味を誘発するために、童話を聞かせたり音楽を教えたりしたことがわかる。⁽⁵⁹⁾中には地域の宗教団体などと協力して音楽会を開催するなど、文化活動の性格を帯びた場合もあったが、⁽⁶⁰⁾たいいていの場合には簡単な童謡と民謡が歌われたとみられる。⁽⁶¹⁾一九三五年に文字普及運動が総督府によって禁止された後、申し込

んでくる読者たちに無料で配付された朝鮮日報社の一九三六年版『文字普及教材』には〈青い鳥〉、〈星数え〉、〈雁〉、〈農謡〉などの各地方の伝承童謡や民謡などが「標準語」で載せられている。この教材の冒頭にある「教授上注意」には、「子音・母音を習ってから字を習い、それから発音の練習をさせよ。それができたら、第一課から教えるが、先ず欄の上に記されている単語を教えてから本文を読ませよ。下欄の民謡、童謡は覚え易くするために入れたものなので、楽しく覚えさせよ」と示されている。⁽⁶²⁾おそらく文字普及運動でも各地方の自生的共同性に基盤を置いた親しい童謡や民謡を、「標準語」の歌詞で歌わせることでハングルを楽しく教えていたとみられる。そしてこの時歌われた童謡や民謡は既に洋楽としての唱歌に比べて低俗で劣等なものではなくなっていた。

伝承童謡や俗歌（雑歌）などは、一九二〇年代に入ると民衆を基盤とした民族の歌である民謡として発見され精力的に蒐集・研究されるなど、この時期にはすでに価値の転換が成されていた。しかも、従来の童謡や俗歌の自生的共同性は民族の原郷としての郷土の共同性へと強引に還元され朝鮮を表象するようになった。⁽⁶³⁾そのため、民族という名の下に自生的共同性を利用して啓蒙を推し進めるためには、民謡や伝承童謡などの歌詞のもつ「低俗」さを正さざるを得なかった。その代表的な例が〈アリラン〉替え歌の〈文字普及歌〉である。〈アリラン〉については、一九二六年の映画『アリラン』の

類例を見ない大ヒットによって主題歌「ヘアリラン」も大流行するようになる、歌詞の卑俗さを挙げて学校や家庭への悪影響を警戒する主張がなされたりした。⁽⁶⁴⁾「文字普及歌」とは、文盲退治とハングル運動を朝鮮文化樹立のための百年の大計と捉え、「両方面の運動を一層促進・普及せしめよう」として朝鮮日報社が一九三〇年末に行った歌謡懸賞募集で選外佳作に当選した朴鳳俊の「ヘアリラン」替え歌のことである。

一、我が山河津々浦々／新生活の音が響き渡るよ

エーヘ エーハ力強い／文盲者を無くすという声高らなり。

二、空中に行き交うあの飛行機／山河を轟かす汽車は

貴方のことも知っていようが／文盲で苦しむこの胸よ

三、真夜中が日中に変わった今日も／目はあるのに読めないのは
はこれどうしてか

学ぼう学ぼう早く学ぼう／知は力よ学ばずんば生きられず

リフレイン、アリランアリランア拉里ヨ／アリラン峠を越え行く

アリラン峠は別の峠よ／此の世の文盲は越えられず

『朝鮮日報』は選外佳作の作品に楽譜を付けて「この歌が意味からも曲調からも私たちの郷土の味と匂いを深く持っている」ため、

「我が大衆が歌えるよう一般化させたい」⁽⁶⁵⁾と述べ、「ヘアリラン」の大衆性を啓蒙に活用しようとしていた。一九三一年の第三回文字普及班で配布された改訂版『ハングル原本』^{한글원본}には朴鳳俊の「文字普及歌」が載っている。⁽⁶⁶⁾そして同じ年の文字普及班の体験記中には新たに紹介された「ヘアリラン」に関する報告もあった。培材高普の尹基永（ユン・キヨン）は「流行する「ヘアリラン」の歌詞は退けられ」「我が山河津々浦々から学ぶことは力の基、学ばずんば生きられず」という『ハングル原本』に載っている真の「ヘアリラン」が子供たちによって元氣よく歌われたことを紹介している。⁽⁶⁷⁾また、普成専門の李義一の報告にも「我が山河津々浦々新生活の音が響き渡るよ、エイヘエーハ、元氣よく文盲者を無くそうという声高らかなり」が「村中を轟かすように四方から歌われた」という記述がみられる。⁽⁶⁸⁾

しかし、すでに民衆の間で大衆性を確保した曲の替え歌が啓蒙に活かされたのは民謡だけではなかった。文字普及運動では上記の童謡や民謡のように興味を誘発して記憶を助けるための歌以外にも文字の暗記のための歌も歌われたとみられる。朝鮮日報社主催の第一回文字普及運動に参加した学生の体験記には、「少女たちは『うちの赤ちゃんを寝かせてくれ』の代わりに、少年たちは『千年を生きよう、万年を生きよう』のような歌の代わりに、『私が手に持った鎌は「フ」で、私が逆さに持った鎌は「リ」字で、下駄の歯は「ㄷ」字よ』と

『外に点が一つはト字で、外に点が二つはト字よ』と文字打令を歌います。書堂の犬も三年も経てば風月を詠ずという諺のように、三・四歳の子供たちも歌うようになり、村中が文字打令で明け暮れる⁽⁶⁹⁾と紹介している。また第二回の時も、たとえば「鳥追い小屋で歌うハングル歌」という表題で「昼は皆野に出て働きます。あちこちの鳥追い小屋から『ガギヤ』『ゴギョ』の声が聞こえると、この胸は喜びに躍りました」と紹介している体験記などから、文字がリズムとメロディーを伴った簡単な歌の形で教えられたことが窺える。このような「下から」の叫びが「上」に収斂され明らかな形として提示されたのが、国語学者の李鉀（イ・カップ）が〈勸学歌〉のメロディーに歌詞を付けた〈文盲打破歌〉である。

一、耳があつても聞けなきやつんぼで／口を持っても話せなきや啞よ
目を開けても読めない字の盲人は／盲人でもつんぼに啞なり。

二、聞く代わりに見ろという文が読めないから／つんぼ以外の何ものでもない
話すように書く文が書けないから／盲人以外の何ものでもない。

三、人と同じ目と耳を持ちながら／一生の恨みをいかに堪えら

れよう

分かりやすい我が文字は気持ちさえあれば／いかなる鈍才でも皆習えよう。

四、鎌を置いて「字を誰が知らないか／鳥籠をひっくり返したら」と自然に気付く
定規を立てて測れば「字になり／砧を横におけば一字になるよ。

（中略）

十、鋸みたいな「と」灯檠「を」／上と下をくっ付けたら「と」じゃないか

鳥籠の「を」をまたくっ付けよ／死ぬ者も生かす「^金と」いうなり。

十一、このように色々と組み合わせれば／口に出す言葉は書けないわけがない

一日に一字二日に二字まめに／こうして習っていけば遂に習熟できるよ。

一九三二年『ハングル^{한글}』第一巻第五号に「文字歌^{문자노래}」という題下に紹介されたこの歌詞は最後の節に「このように色々と組み合わせれば口に出す言葉は書けないわけがない」とあるように、さらに内容を増やして半切表を覚えさせる構造になっている。この歌の原曲で

ある〈勸学歌〉（奥好義作曲）は『学部唱歌集』に載っていた曲で、単純で典型的な唱歌であるうえに知名度もあり暗記に相応しいため、替え歌を付けたとみられる。⁽⁷¹⁾ この替え歌も東亜日報社で一九三三年七月に発行したヴ・ナロード運動の教材である李允宰（イ・ユンジエ、一八八八〜一九四三）の『ハングルの勉強』の最後の頁に〈文盲打破歌〉というタイトルで載っており、文字普及運動にも活用された。一九三三年の第三次ヴ・ナロード運動に参加した学生の体験記には「夕方になって始める時には各班で〈文盲退治歌〉を歌ってから勉強を始め、（中略）〈文盲退治歌〉で元氣よく終わった」と報告されており、三四年に参加した学生は「勸学歌だけ歌っていた口で〈文盲打破歌〉を歌うようになったこと」が「嬉しい出来事」であったと紹介している。⁽⁷²⁾

以上のように従来の民謡や唱歌の大衆性を啓蒙運動に活用するために作られた替え歌は、口誦されるうちに改作・再創造されるといふ属性上、本来の意図を越えて民衆の抵抗的なメッセージを盛り込んだりもした。夜学で不穏な唱歌や民謡を教えて弾圧を受けた記事などは上記の文字普及運動が植民地権力への協力と抵抗の境を危うく行き来していたことを物語るものであろう。

五、レコードで聞く朝鮮語読本

一九三五年一〇月二八日に開かれたハングル日の記念式行事には、

実は特別な余興が用意されていた。それは「朝鮮語の標準語を教えるために使う、読み方と歌い方と話し方からなる最初の留声機盤」の視聴会と「新たに発明された朝鮮文タイプライターでハングルを打つてみせる」催しであった。⁽⁷³⁾ 特に、一九三〇年から発行された第三次『朝鮮語読本』の一部を普通学校の児童たちが直接朗読した『オーケー教育レコード 朝鮮語』（二枚組。以下、『読本』レコード）は、右のパンフレットから分かるように、朝鮮語学会の関係者である沈宜麟（シム・ウイリン、一八九四〜一九五二）が朗読法の指導を、鄭寅燮が材料の選択及び音声指導を担当しており、朝鮮語学会の機関誌である『ハングル』⁽⁷⁴⁾ 第三巻第一〇号（一九三五）の「ハングル誕生四八九年」記念式関連号にレコードの製作に関する特集が載っているなど、朝鮮語学会の積極的な関与によって作られたことがわかる。上記の『ハングル』誌にオーケーの文芸部長でレコード製作の実務を担当した金陵人（クムヌンイン、？〜一九三七）はその経過を報告した文章で「吹き込み当時、これを励ます意味で朝鮮語学会の李熙昇氏がわざわざ吹入所まで来臨した」と記している。⁽⁷⁵⁾

しかし、この「朝鮮初の朝鮮語教育レコード」の製作は、当時朝鮮盤を発行していたレコード製作会社の中で最も活発に運営しながら、「大衆の低級な趣味に迎合」する流行歌などの発売を主力にして「識者階級から朝鮮語のレコードを容赦なく唾罵」されていたオーケーレコードのイメージ改善という企業戦略とも合致してい



図2 『普通学校朝鮮語読本』レコードに添えられていたパンフレットの表紙。出典は鄭寅燮『国語音声学研究』

た。金陵人は「もつと広い将来を開拓するために大衆の要求より一歩先に進んで大衆の質的向上を企てよう」としたと、その製作意図を明らかにしている⁽⁷⁾。しかも、このような教育レコードの製作は治安妨害と風俗壊乱などの名目でレコードの検閲を強化していた総督府の検閲当局からも歓迎される事業であった。当時の大衆雑誌『三千里』に載った、検閲で禁止処分を受けたレコードを紹介した文章には「レコード業者も文化の使命を自負して不穏不良なレコードを製作しないのみならず、最近は一歩前進して有益なレコードを次第にこの社会に出すようになりました。昨年度はオーケー会社が朝鮮語教育レコードを創始的に製作し、一般学童に便宜を与えており、コロムビア会社は『国語読本』すべてを正確な音でレコード化する予定だという。このように進歩すれば文化上の価値がどんなに多いかを誠心に期待」しているという検閲当局者の言辞が引用されている⁽⁸⁾。皇国臣民としての朝鮮人の動員のためにも総督府は解放前後まで朝鮮語専用のラジオ放送を通して朝鮮語を管理しようとしたことを考慮すれば、レコードによる朝鮮語教育はその延長線上に置かれていた可能性が高い。とにかく『国語読本』のレコード化を牽引するほどの先駆的なこの事業は、ハングル音声教材の普及という朝鮮語学会の意図がレコード会社の企業イメージ戦略はもちろん、総督府の検閲政策とも絶妙に共鳴する場で運よく結実したものであった点は指摘されなければならない。

当事者たちの言及によれば、一般社会の反応もかなり良かったとみられる。例えば、金陵人は「この教育レコード発売の知らせが江湖に伝えられると、社会の諸賢からたくさんの方の激励と声援の文章が毎日数十通も寄せられているので、これから一層勤勤孜孜と教育レコードの製作を継続して朝鮮の現下、焦眉の運動である語文教育運動に微力ながら寄与できるよう努め、学校と家庭において児童教育のよい師友を提供し、第二世国民である児童の情緒教育を引き受け⁽⁷⁹⁾」外、家族団欒になくはならない備品を提供したい⁽⁸⁰⁾と述べた。

鄭寅燮も「各学校ではこれを標準としてハングル教育に大きな成果を収めており、各家庭でも児童たちがよく聞き取りそのレコードから出る発音と読み方を習っており、特にその中に流れる音楽の伴奏は不毛だったあの時代の情緒教育に大変役に立った⁽⁸¹⁾」と振り返っている。ここで二人の関係者が共に『読本』レコードがハングル教育はもちろん情緒教育にも寄与したと言及しているところが注目される。それは、実はこの事業を実質的に主導したのは朝鮮語学会というより、朝鮮語研究の基礎になる音声学を研究する学術団体として一九三五年四月二四日に創立された朝鮮音声学会と、その実質的な責任者であった鄭寅燮であったことと関係があると考えられる。鄭寅燮は自ら回顧しているように朝鮮音声学会が推進した事業として「外来語表記法統一案」の制定と「教育レコード」の製作を挙げている⁽⁸²⁾。しかし、敢えて彼の回想に頼らなくても、レコードの内容や

材料選択に表れた言語認識や言語教育観には鄭寅燮の持論が深く反映されていることがわかる。上記の『ハングル』誌に載っている彼の文である「言語教育と蓄音機⁽⁸³⁾」からレコードの製作意図をもう少し詳細に読み取ってみよう。

鄭寅燮が語文教育における教育レコードの重要性を強調したのは、時間の制限や非教育的な内容をもつラジオ放送やトーキーとは違い、レコードは教育的な内容を繰り返し再生できるという理由の外に、より根本的には「音声は文を書く文字よりもっと根本的なもの」とみなす一九世紀比較言語学の核心に基づき語文を統一するのに効果的であるという言語認識があったからである。そしてそれは「現今文化が発達した社会は語と文の統一を唱えて、各地方の方言は次第に減少すると共に、文化の中心地を土台にした中流以上の現代語をその標準語と定め、これに照らして言語の教育を合理化している」と主張しているように、規範言語としての中流以上のソウル語による画一化だったのである。しかも、彼はレコードを活用したこのような言語規範の推進を学術誌を通して訴えたのみならず、レコードの内容そのものにも反映させているが、第一学年用の最初のトラックには「朝鮮語といってもいろいろあつてうっかり間違ひ易いですが、しかも地方によって方言があるため、互いに聞き分けられない場合が多いです。標準語をしっかりと学ばなければならない理由がここににあります」という解説をつけている。だが、このような標準語認

表5 朝鮮語読本レコードの内容

	単 元	レコードの内容
第一学年用 (読本巻一)	第一課～第一〇課 (正しい読み方と間違った読み方)	鄭寅燮の解説、示範後児童が朗読
	第一七課・第四三課 (半切)	鄭寅燮の解説、示範後児童が朗読
	第三九課 (朝日) 아출해	朗読後歌唱
	第四〇課 (お父さんと息子) 아 버 지 와 아 들	教師の示範後児童が朗読
	第四五課 (象) 코끼리	示範及び会話体を習う
	第五三課 (雨) 비	朗読後歌唱
第二学年用 (読本巻二)	第一課 (春) 봄	朗読と歌唱
	第一六課 (虹) 무지개	朗読後歌唱
	第二六課 (水車) 물방아	朗読後歌唱
	第二九課 (山彦) 산울림	示範及び会話体の練習 (名曲挿入 〈スイートホーム〉)
	第三一課 (韓石峯)	示範後児童が朗読
第三学年用 (読本巻三)	第五課 (朴赫居世)	会話体の練習 (宮廷雅楽伴奏)
	第一四課 (夢) 꿈	会話体の練習 (効果音に飛行機プロペラ)
	第一五課 (月) 달	朗読後歌唱
	第一九課 (子守唄) 자 장歌	朗読後歌唱
	第四課 (花弁) 꽃잎	句読点活かし美文朗読示範
	第二六課 (昼御飯) 점심밥	句読点活かし美文朗読示範
第四学年用 (読本巻四)	第八課 (こぶを取られた話) 혹뎌이 야기	趣味教材 (歌唱、効果音)
	第一課 (朝の海) 아침바다	朗読後歌唱 (効果音)
	第二八課 (扶余)	朗読後歌唱
第五学年用 (読本巻五)	第九課 (漁夫歌)	朗読後名曲鑑賞 (ボルガの舟歌)
	第一二課 (諺文の制定) 의	朗読 (李王職雅楽伴奏)
	第二一課 (沈清)	会話体で朗読 (沈清歌大琴伴奏)
第六学年用 (読本巻六)	第二課 (時調五首)	朗読 (古楽器で伴奏)
	第六課 (孔子と孟子) 와	朗読
	第九課 (詩話二篇)	朗読後名曲鑑賞 (エレジー)
	第二二課 (途上の一家) 의	朗読 (名曲伴奏 〈詩人と農夫〉)

識はすでに『한글 맞춤법 통일안』(一九三三)にも「標準語は

大体において現在中流社会で使われるソウル語とする」とあるため、朝鮮語学会でも共有された方針であった。むしろ新しい音声メディアであるレコードを通して標準語の劇的な浸透を図ろうとしたという点では、教育レコードの試みは朝鮮語学会の意思が積極的に投影されたものともいえよう。

しかし、鄭寅燮にとり教育レコードが重要な意味をもつ理由はもう一つあったのだが、それは先述した「児童の情緒教養」の涵養を支援することであった。レコードは何よりも音楽鑑賞の重要な道具なのである。彼は『読本』レコードにおいて言語教育と音楽教育を巧みに組み合わせようとしたが、この点にこそ鄭寅燮の独創性が発揮されている。

レコードの内容を提示すれば表5のとおりである。

具体的に見れば、「(朗読後) 歌唱」となっているところは韻文に曲を付けた歌で全二七トラック中の十トラックがこれに当たる。

〈月〉〈虹〉などを除けば『読本』レコードのために特別に作られたもので、作曲は当時京城交響楽団の指揮者兼李王職雅楽部嘱託であった李鍾泰(イ・ジョンテ)が引き受けたが、彼は音楽指導も行った。唱歌以外にも名曲鑑賞で洋楽や朝鮮の宮廷音楽である雅楽が活用されており、言語教育と音楽教育の統合による情緒教養の涵養が模索されている。植民地期の学校教育の場で実現できなかった『朝

鮮語読本』と唱歌との緊密な連絡関係はここで初めて達成されたと見える。

ところでこのような言語教育観は鄭寅燮の持論でもあった。彼はすでに二〇年代にセクトン会で活動しながら児童に対する芸術教育の重要性を説いており、中でも最も効果的なものとして演劇を挙げていた⁽⁸³⁾。一九二六年からは彼自身も『オリニ』誌に童話劇を発表していった。また、一九二九年には『東亜日報』の学芸面において言語教授と文芸教育の関係について次のように論じている。

文句の暗誦にのみ精力を消耗し、直接言語内容を直感できない無味乾燥な内容と方法によっていたら、結局その言語の生命は理解できないことを意味する。語学教材に文芸的価値あるものを使用することは、いかなる点からみても効果が大きい。

(中略) 現下各国は勿論、各々それ自体としての母語学習において自由作文や文芸的内容をもった読本や其の他の学科においても、いわゆる芸術的指導方法が実践されており、そこに学徒たちの美的鑑賞力と創造性による表現機能の完成を期待しているところである。(中略) 現下朝鮮においても幼年教育に童話・童謡などの提唱による効果を強く指摘しうるところである。すなわち、芸術的試練を受けてきた者は、いかなる方面に進出しようが、意思の表現能率が高く、受けていない児童よりはは

るかに鋭敏な聡明を持つている事実を日常見ている。⁽⁸⁴⁾

要するに、母語学習において童話や童謡などによる芸術教育が学生たちの鑑賞力と創造性を向上させ表現力を高めるということである。『読本』レコードに会話体の単元が挿入されていたり「朝鮮語読本唱歌」が多数製作されたことは、彼のこのような芸術教育論に即した言語教育観に基づく措置であったといえる。彼は「言語教育と蓄音機」の末尾でこのような情緒教育を通して豊かな表現力を培い「明朗かつ正直」に育った朝鮮児童たちによって発せられた標準語音がレコードを通して「国際的に地球を回りまわって満洲、ハワイ、其の他の外地にいる朝鮮児童のハングル文字教育に」まで至大な役割を果たすことを確信してやまない。⁽⁸⁵⁾彼のこの確信は、ある意味では世界各地に離散している朝鮮民族の紐帯を強固にし民族意識を涵養する核心として朝鮮語を捉える言語民族主義に裏付けられたものと理解することもできる。しかしこの文章において鄭寅燮は朝鮮民族にとり朝鮮語とはいかなる存在なのかについては徹底的に口をつぐんでいる。これを日本語を日本人の精神的な血液で国体を維持する中心と捉えた上田万年が確信に満ちて「一朝（戦勝の）慶報に接する時は、千島のはても、沖繩のはしも、一斉に君が八千代をことほぎ奉るなり。もしそれ此のことは外国にて聞くときは、これは実に一種の音楽なり、一種天堂の福音なり」と説いたことと比べ

てみれば、言語認識における明白な温度差があることがわかる。鄭寅燮の志向は、あくまでも国体を象徴する「国語」としての日本語を核心に置いた植民地朝鮮の言語秩序の下位体系としての範囲を逸脱しない限りにおいて朝鮮語の統一と順化による豊かなコミュニケーションの確保にあったといえる。

ところが、朝鮮語が帝国の言語秩序が及ぶ範囲を通り越して外に出れば、植民地の言語編制に攪乱を引き起こす危険性を内包する。「国語」とは一国の独立を維持するために最も必要なものとする認識は言語民族主義の核心でもあるからである。鄭寅燮が参加した世界言語学者大会は、彼が意図しようとしなかつた関係なく、朝鮮語が朝鮮民族を代表する言語として立たされた場だったのである。ちょうど民族の共同作品として発見された民謡が朝鮮語の外遊に同行したのは、それが朝鮮語と朝鮮民族との結合を一層自然なものとする装置として機能したからであろう。四二年の「朝鮮語学会事件」はこのような危険性さえも抉り出そうとした植民地権力による朝鮮語摘出の大手術だったといえよう。

六、終わりに

以上の分析から、植民地朝鮮で強制された唱歌と「国語」教育との関係を「皇民化政策」の観点でまとめ直してみよう。西島央は、近代日本の学校音楽は児童の生活、自然、心性などに対する童謡的

な情緒、愛郷心などからなる「下から」吸い上げられた唱歌と、忠君愛国の国民精神構築のために「上から」徹底的に強制された「儀式唱歌」などを、斉唱という授業方式を通して身体化させることで児童を国民化していったと説いている⁽⁸⁷⁾。しかし植民地朝鮮での音による「皇民化」とは、「上から」の「国語」の音の強制と「下から」の朝鮮語の音の抑圧・排除の政策であり、唱歌教育はそれを身体化しようとする試みだったといえる。少なくとも学校の間では朝鮮人の「下から」の声を取り入れようとする、朝鮮語を動員する動きはほとんどみられなかったか極めて歪曲された形で成された。それは根本的に日本語は国民精神の精髓でなければならぬ「国語」であるにもかかわらず、植民地末期まで相変らずその朝鮮社会への浸透には限界があったという事実と関連がある。実は、普及率が依然として低調な「国語」に代わって噴出する国民精神を効果的かつ派手に演出することができたのは、公共の場で斉唱される唱歌や軍歌などの歌だったからである。

また「国語」の普及率が低かったために朝鮮語も統治に積極的に活用しなければならなかった植民地権力にとって朝鮮語は情報(意味)の効率的な伝達のための手段として管理されたのみで、朝鮮語唱歌による情緒涵養や、まして朝鮮語唱歌の斉唱による音の共同性の実現は念頭にもなかったのである。しかし、教育の場で実現されなかった朝鮮語と朝鮮語唱歌との結び付きは主にメディアの場で多

様に試みられ、時には体制内に吸収されたり、時には「国語」という音の共同性の持つ虚像を攪乱させたりした。何故なら、植民地期朝鮮における「国語」政策が「国語」の内面化には失敗したまま音の共同性を性急かつ過激に推し進めるものだったからである。

注

※注の書誌に付いている「*」はハングル文で書かれていることを示す。

(1) * 鄭寅燮『国語音声学研究』、徽文出版社、一九七三年、三八一頁。

(2) * 鄭寅燮、前掲注(1)書、三八三〜三八四頁。

(3) * 林鐘国『親日文学論』、平和出版社、一九六六年。

(4) * 鄭寅燮、前掲注(1)書、三五三〜三五六頁、『氷の下にも水は流れ―「朝鮮語学会受難」五〇周年記念集―』、ハングル学会、一九九三年。

(5) * 鄭寅燮、前掲注(1)書、一〇七頁。

(6) * 鄭寅燮『セクトン会子供運動史』、学園社、一九七五年、一七六〜一七七頁。

(7) Yukiko S. Jolly, "The Use of the Songs in Teaching Foreign Languages," *Modern Language Journal*, Vol. 59, No. 1/2, 1975. Hermann GOTTSCHESKI 「音楽教育と外国語教育の接点―語学学習における歌唱のすすめ―」『世界の日本研究』一四、二

〇〇八年。

(8) 松永典子『「国語」教育から「東亜の日本語」教育への道―植民地・占領地の日本語教育―』『日本語教育研究』、一九九七年、七七～七八頁。

(9) 前田均「日本語教育用『アイウエオの歌』数種」『外国語教育』三〇、二〇〇四年。

(10) これは唱歌教育の実施のために伊沢修二が目賀田種太郎と連名で文部卿に提出した上申書です。確認できる。「夫レ音楽ハ学童ノ神氣ヲ爽快ニシテ其ノ勤学ノ勞ヲ消シ、肺臓ヲ強クシテ健全ヲ助ケ、音声ヲ清クシ、発音ヲ正シ、聴力を疾クシ、考思ヲ密ニシ、又能ク心情ヲ楽マシメ其ノ善性ヲ渙発セシム」(伊沢修二・目賀田種太郎「校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ見込書」、一八七八年、引用は『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』、音楽之友社、一九八七年)。

(11) 長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』、吉川弘文館、一九九八年、第一章。

(12) 山東功『唱歌と国語―明治近代化の装置―』、講談社、二〇〇八年。

(13) 「国語」の普及率が植民地期に入ってから第三次朝鮮教育令(一九三八)が公布されるまで低かったのは、普及政策が主に学校教育を通して推進されたためと考えられている。ところが、三八年以降になり朝鮮民衆に対する日常的な「国語」の使用を強制する「国語常用運動」が「国語講習会」などの開催を通して全社会的に展開されると、一九三九年に一三・八九%、一九四〇年に一五・五

七%、一九四一年に一六・六一%、一九四二年に一九・九四%、一九四三年に二一・一五%と五年間でほぼ10%近く増えた。「講習会」が約二ヶ月間の短期コースであったのみならず、その目標も「簡単な会話が可能」な程度であったため、統計そのものは多分に成果主義的なものであったことを念頭に置く必要がある。参照、『第八十六回帝国議会議説明資料』、朝鮮総督府、一九四四年。

(14) 普通学校の就学率の推移については、呉成哲「植民地初等教育の形成」、教育科学社、二〇〇〇年、参照。

(15) いくつか例を挙げると、『大韓毎日申報』は「音楽は役に立つか」(一九一〇年一月十二日付)という見出しで皇族の李載完が「音楽で日々を過ごしている」ことを非難した。或いは同徳女学校長だった趙東植(チョ・ドンシク、一八八七～一九六九)は、一九〇四年以降官立漢城漢語学校で新学問を学んだ時、「(当時新たに導入された教授科目であった)唱歌はまともな人間が手を染めるものではないと考え、練習を怠った結果、一学期の成績が大変悪くて」こっそり山に登って練習した経験を回想している(『朝鮮日報』一九三七年一月十日付)。

(16) *劉銓「音楽の効能」『大韓興学報』二、一九〇九年。

(17) *『官報』三五四九、一九〇六年九月四日付。

(18) *張膺震「教授と教科に対して(前号続)」『太極学報』一五、一九〇七年。

(19) 文部省音楽取調掛編『小学唱歌集(初編)』、一八八一年(引用は、『教科書・啓蒙文集』新日本古典文学大系明治編一一、岩波書店、二〇〇六年、九九頁)。ルビは省略した。

- (20) * 劉銓、前掲注(16) 論文
- (21) 伊沢修二・山住正己校注『洋楽事始 音楽取調成績申報書』平凡社、一九七一年、一〇六～一〇七頁。
- (22) 「大正五年十一月十三日警高機発第五二七号・不穩者発見処分ノ件(京畿道警務部報告) 姜徳相編『朝鮮(二)』現代史資料二五、みず書房、一九六六年、一〇頁。引用にあたって現代語訳した。
- (23) * 「訓禁唱歌」『皇城新聞』一九〇九年十月二十七日付、* 「唱歌もだめか」『大韓毎日申報』一九〇九年十月二十七日付、* 「愛国も適当じゃない」『大韓毎日申報』一九一〇年五月二十四日付、など。
- (24) * 「音楽教科の著述」『万歳報』一九〇七年六月七日付。
- (25) * 「唱歌編刊期」『皇城新聞』一九一〇年三月十七日付。
- (26) このことは、間島に設立された民族主義系の私立学校であった光成中学校で一九一四年に発行され、総督府により不穩唱歌として押収された『最新唱歌集』に『学部唱歌集』に収められた曲が二十曲以上選曲されていることからわかる。
- (27) 学部「第二回官公立普通学校教監会議要録」、一九〇八、七七～八一頁。
- (28) 学部、前掲注(27) 文、七九頁。この会議の一ヶ月前に学部では「通俗教育上に参考する為に地方で流行する俚謡と童謡などを査察する必要がある」としており、いわゆる「民謡蒐集」を開始している(「俚謡童謡査察」『皇城新聞』一九〇八年六月十八日付)。
- (29) 田村虎蔵「韓国併合と音楽教育問題」『音楽界』四一、一九一一年。
- (30) 「朝鮮総督府新編唱歌集の発行」『朝鮮教育会雑誌』二七、一九一四年。
- (31) 『新編唱歌集』には同唱歌集収録曲を朝鮮語訳した三曲に『学部唱歌集』収録曲三曲を加えた六曲が、『普通学校唱歌書』には上の六曲に同唱歌集収録曲を朝鮮語訳した二曲を加えた八曲が収められている。
- (32) * 「朝鮮語唱歌と朝鮮歴史の教授」『東亜日報』一九二二年九月二十日付。
- (33) 『朝鮮日報』一九二三年十二月七日付の* 「普校用唱歌歌詞応募要件」という記事には、『補充唱歌集』編纂の意図を「先般朝鮮教育令改正の結果、普通学校では『尋常小学唱歌』(全六冊)を教科書に使用するようになった」と述べており、第二次朝鮮教育令以降は『尋常小学唱歌』が普通学校の教材として使われたことを伝えている。
- (34) 「私立学校ノ唱歌ニ関スル件」『朝鮮総督府官報』一〇一八、一九一五年十二月二十四日付。
- (35) * 「紀元節唱歌統一」『朝鮮日報』一九三七年十一月二十七日付。
- (36) * 「あらゆる儀式で『君が代』の他に『海行かば』の合唱」『朝鮮日報』一九三八年六月九日付。
- (37) 高仁淑『近代朝鮮の唱歌教育』、九州大学出版会、二〇〇四年、一二二頁。
- (38) * 劉銓、前掲注(16) 論文。
- (39) 学部、前掲注(27) 文、七八・八〇頁。
- (40) 特に、総督府が一九三九年に編纂した『初等唱歌』の「結言」

には「文・用語等ハ成ルベク読本ト補助ヲ一ニセンコトヲ期ス」と明記されている。

- (41) ①〈君が代〉―『国語読本』巻四「君がよ」／②〈一月一日〉―『国語読本』巻二「シンネン」／③〈紀元節〉―『国語読本』巻四「神武天皇」／④〈天長節〉―『国語読本』巻三「テンチョウセツ」／⑤〈勅語奉答〉―『修身書』巻四「教育ニ関スル勅語」／①④「修身書」巻二「祝日・大祭日」。なお、一九二三年から使われた第二次『朝鮮語読本』にも「天長節祝日」(巻二)、「紀元節」(巻三)が載せられている。

- (42) * 呉成哲、前掲注(14)書。

- (43) 『朝鮮總督府官報』七九九、一九一五年四月六日付。

- (44) 呉成哲の前掲注(14)書の調査に基づき『羅馬字新編唱歌集』使用期間中の普通学校と私立学校の学生数の推移を表にすると次のとおりである。

年度	普通学校	私立各種学校
一九一五	六〇、六六〇	五一、七二四
一九一七	七五、五八三	四三、六四三
一九一九	八〇、六三二	三四、九七五

- (45) 「セクトン会」の看板童謡作曲者として〈半月〉^{반달}などを発表した尹克栄(ユン・グギョン、一九〇三―一九八八)の一九七三年の回顧ではあるが、彼は日本留学中に方定煥(バン・ジョンファン、一八九九―一九三二)から「国も奪われ言葉も奪われたのに、どうして歌さえ日本の歌を歌うかい? (中略) 彼ら(子供)には私たちの歌もない。尹克栄よ、子供に与える歌を作りなさい」と篤励され、

童謡運動に加わることになったと述べている。*『尹克栄全集Ⅱ』、現代文学、二〇〇四年、四八四―四八七頁。

- (46) * 普校用唱歌歌詞応募要件』『朝鮮日報』一九二三年十二月七日付。

- (47) 『普通学校教科用唱歌歌詞募集』『朝鮮總督府官報』三三八九、一九二三年十二月二十九日付。

- (48) * 한영희『韓国の童謡』世光音楽出版社、一九九四年、五八頁。

- (49) 植民地期朝鮮におけるラジオの植民地近代性に関する分析は、* 徐在吉「日帝植民地期ラジオ放送と『植民地近代性』」『사이공간』1、1100六年、参照。

- (50) 「初等唱歌」所載新作教材の取扱』『教科書編輯彙報』四、朝鮮總督府、一九三九年。

- (51) * 「小学生唱歌懸賞募集―皇国臣民の精神涵養―」『朝鮮日報』一九三八年七月二日付。

- (52) 「初等唱歌」歌詞の当選作と選後の感想』『教科書編輯彙報』四、朝鮮總督府、一九三九年。

- (53) 「芸能科音楽」『教科書編輯彙報』八(国民学校特輯)、朝鮮總督府、一九四一年。

- (54) 李完応「朝鮮の学政当局は何故朝鮮語科を度外視するか」『朝鮮及朝鮮民族』一、一九二七年、* 「ハングルをいかに普及させるか―それに対する教育家諸氏の意見―」『東亜日報』一九二八年十一月十一日付。

- (55) * 「文盲退治の運動」『東亜日報』一九二八年三月十七日付。

- (56) * 崔民之・金民珠「日帝下民族言論史論」、日月書閣、一九七

八年。

(57) *『実地運動に五つの注意』『東亜日報』一九三二年七月十八日付。

(58) *鄭晋錫編『朝鮮日報・東亜日報』文字普及運動教材―一九二九―一九三五―、LGサンナム言論財団、一九九九年。

(59) *『日々増えて案外好成績』『朝鮮日報』一九二九年八月十六日付、*『馬山府・生徒四百名、音楽と衛生も歌った』『東亜日報』一九三二年八月四日付、*『信川郡・ほとんどが女子、毎日唱歌を教え』『東亜日報』一九三三年九月一日付、*『平山郡・運動用具準備、同里をまわって唱歌』『東亜日報』一九三二年九月二日付、*『高陽郡・音楽で円満に終了』『東亜日報』一九三三年八月十日付、*『高陽郡・百余名に音楽・童話も教え』『東亜日報』一九三四年八月十六日付、*『釜山鎮・移動しながら音楽技芸も教え』『東亜日報』一九三四年八月十六日付、*『新義州・音楽、体操も 女隊員活動も非常』『東亜日報』一九三四年八月十八日付、など多数。

(60) *『靈山・文字普及と音楽会開催』『朝鮮日報』一九三一年八月十九日付、*『馬山府・音楽会も開催 ハングルの教えられず』『東亜日報』一九三四年八月十六日付、*『尚州郡・家庭婦人が中心 音楽会も開催』『東亜日報』一九三四年九月四日付、など。

(61) 第四回ヴ・ナロード運動の学生体験記の中には、ハングル講習で童謡と民謡を教えたという報告がある(*『釜山鎮・移動しながら音楽技芸も教え』『東亜日報』一九三四年八月十六日付)。

(62) *鄭晋錫編、前掲注(57) 書。

(63) 林慶花「民族の歌としての〈アリラン〉の創出―『民謡』概念

の導入から『郷土民謡』の発見まで―』『朝鮮半島のことばと社会』、明石書店、二〇〇九年。

(64) *『新流行！怪流行！』『別乾坤』一七、一九二八年、*蔡奎燁『「レコード」で見た朝鮮の歌―大家の出現を切望―』『毎日申報』一九三二年二月三日付。

(65) *『文字普及歌』『朝鮮日報』一九三一年一月十六日付。

(66) 原本はみつからなかったが、『朝鮮日報』二〇〇八年十月十四日付(*『朝鮮日報』一九三〇年代〈アリラン〉でハングル普及)で金煉甲により公開された。

(67) *『江華の新しい〈アリラン歌〉文班万歳声裡に感激の涙で閉会される』『朝鮮日報』一九三一年八月二十五日付。

(68) *『田園で興る我が文字普及歌』農民は働く時も歌います『朝鮮日報』一九三二年八月二十七日付、*『英陽文字普及班 最後』に〈アリラン〉で解散『朝鮮日報』一九三二年九月十三日付。

(69) *『村中が文字打令 牧歌の代わりに』『朝鮮日報』一九二九年八月二十七日付。

(70) *『鳥追い小屋で歌うハングル歌』『朝鮮日報』一九三〇年九月二十四日付。

(71) この曲は「ヨナ抜き音階」「ピョンコ節」という音楽的構造を持った典型的な唱歌である。

(72) *『大田郡・文盲退治歌で每晚始めた』『東亜日報』一九三三年九月二十二日付。

(73) *『碧潼郡・鎌を見て「も知らなかった文盲者を目覚めさせ」』『東亜日報』一九三四年九月四日付。

- (74) *「アリラン」教えて懲役の羽目に」『朝鮮日報』一九三一年五月十日付、*「夜学教員検挙、不穏な文が入った唱歌集が問題」『東亜日報』一九三〇年九月九日付、*「夜学講習所襲撃 先生・生徒等検挙 原因は某種の不穏唱歌の嫌疑か 事件はさらに拡大」『朝鮮中央日報』一九三六年三月三十日付、など。
- (75) *「四百八十九年記念式挙行 今夜明月官にて」『東亜日報』一九三五年十月二十九日付。
- (76) * 金陵人「朝鮮語教育レコード吹き込み製作の経過」『ハングル』三一〇、一九三五年。
- (77) * 金陵人、前掲注(76)文。
- (78) *「どんなレコードが禁止に当たるか」『三千里』八一四、一九三六年。
- (79) * 金陵人、前掲注(76)文。
- (80) * 鄭寅燮、前掲注(6)書、一七六頁。
- (81) * 鄭寅燮、前掲注(1)書、一七六頁。
- (82) * 鄭寅燮「言語教育と蓄音機」『ハングル』三一〇、一九三五年。
- (83) * 鄭寅燮「児童芸術教育」『東亜日報』一九二八年十二月十一日付。
- (84) * 鄭寅燮「文芸的教育の境遇と所感(四)」『東亜日報』一九二九年五月七日付。
- (85) * 鄭寅燮、前掲注(82)文。
- (86) 上田万年「国語のため」、富山房、一九三五年、一三頁。
- (87) 西島央「学校音楽はいかにして『国民』をつくったか」、小森

陽一他編『編成されるナショナリズム 一九二〇～三〇年代1』岩波講座近代日本の文化史五、岩波書店、二〇〇二年。